

出会いの人生

佐々木 知子

参院選のかしましさをよそに(？)、涙腺の緩むことが多い。

まずは趣味の復活。転勤商売になってこの方、ごくたまにばらばら弾くだけだったピアノを、ひよんなきっかけから再開した。腕は格段に落ちているが、徐々に戻ってきつつある。とにかく弾いている間、忘我の境地に浸れるのが素晴らしい。感性が鋭くなったのか、CDの名演奏に涙ぐむことも多くなった。二〇年ぶりに先生について本格的にやり直したいと思いついた自分に、「人生、およそ『絶対』はない」ことを実感している。

そして、四半世紀ぶりの母校(神戸大学法学部)訪問だ。門、石畳、学舎……すべて昔のままだ。マンモス校ではない家族的雰囲気ゆえ、ゼミ以外の多数の先生方と親交が持て、私の貴重な財産となっている。

いまだ現役の筆頭は三井誠教授(刑法)である。当時三〇歳くらいの若き助教授で、「仲人なのに新郎に間違われたんですよ」と笑っておられたが、時が止まったかのように、今もってお若い。「捜研を毎号読んでいるからずっと知ってる感じがしますよ」とのこと。

ゼミのN先生(民法)は、あの大地震で、六甲の一等地にあったマンションが倒壊。ご自身、病を患われる中、わざわざ教え子の講演を聞きに来てくださった。民法のI先生は四日前に亡くなられたとのこと。生前に一度お会いしたかった……。

演題は「検事として、国会議員として」。私は同大初の女性検事なのだ。民法や刑法など多くの講義を受けた懐かしい教室で、学生たちに話をしながら、ふと、学生の私自身が今ここにいるような錯覚を覚えた。あのとき自分が将来検事になる、まして国会議員になるなど想像もしなかった。人生は偶然の産物である。そもそも法学部に進んだことさえ偶然だったのだ。

音楽の道は高校一年時に断念、母の強い勧めもあって医者を目指したが、体力に自信がなくて二年時で断念。当時花形だった同時通訳に憧れ、大阪外国語大学に行くつもりが、見に行つた学舎の汚さにひどく落胆。願書提出ぎりぎりまで大学変更、「とりあえず潰しが利く」法学部に。NHKのアナウンサーは「関西弁だからよほどコネがない」と諦め、四回生直前、T教授(民法)の「必ず通りますよ」の一言で、高嶺の花だった司法試験に挑戦することに。

以後苦しんだ。小学生時代から苦手だった〇×(短答)式に落ち続け、放り出したのが二三歳の夏。心機一転、骨を埋めるつもりで市役所に入ったが、仕事はつまらなく男女差別はひどくて、一念発起。翌春退職して一日一〇時間の勉強を自らに課し、一か月余の後背水の陣で臨んだ短答式に初合格。そのまま論文式、口述式に合格した。

この二年間の苦しさを思えば、以後の何を

も私は耐えることができる。この試練を乗り越えられたのだから乗り越えられないはずはないと、自分を叱咤激励できる。この時代こそが私の人生における最大の財産である。

もしあの挫折を味わわなければ、私はどこにでもいる読書家で終わり、作家の夢など育ませるはずもなかっただろう。夢遊病者のように過ごした一か月後、ふと悟りが開けたあの一瞬は記憶に明瞭だ。「下手でもいい。人生、自分だけの絵を描こう」。夢を持つことで人は救われる。実際すぐに書き始めたがやはり下手で、三〇歳までをモラトリアム期間とした。それまではいろいろと抽出に詰めようと。あつという間に期間が満了、狼狽かつ苦悩したものだ。

弁護士が裁判官にと思っていたが、検察修習で、検事が「公益の代表者」であり、真相究明に努力している意外な(！)実態を知らされた。出会った検事たちは皆人間的で誠実。加えて、検察庁以外にもポストがあるから気が多い私にはいいだろう、弁護士にはいつてもなれるし、の軽い乗りで検事になった。思いのほか居心地が良く、仕事はやり甲斐があつて、一五年がすぐに過ぎた。そして、検事兼作家だったことが参院議員にスカウトされるきっかけに。永田町の生感を間近で見られる体験はなかなか得難いものである。講演終了後、学生の質問に、私はこう答えた。「検事として最も大切なことは」人の気

持ちを思いやること。「検事は素晴らしい職業ですよ。もしなりたい人がいれば、どうぞ頑張ってください。私は、生まれ変わってもまた検事になりたいと思います。言葉に出して胸が詰まった。そんな職業に出会えた自分の幸せ度を初めてのように思い知つたのだ。「人生万事塞翁が馬」。されど「人事を尽くして天命を待つ」。出会いの連続が人生を形作っていく。偶然の出会いが必然になるかどうか、幸せに結びつくかどうか。否、必然にするか、幸せに結びつけるか、それは決して運命ではなく、選り取る人次第なのだ、改めて思う。人生、まだ先は長い。決して諦めないことだ。

(元検事・現参院議員 ささき ともこ)



著者略歴
五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月、参院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年一月に『少年法は誰の味方か』(角川書店)が発行となった。
<http://www.2tky.3web.ne.jp/~tomokos>
にて議員活動等を報告中。

女性検事が見る真実
捜査官へのヒント その④

『波の塔』

佐々木 知子

日本は亜熱帯地域に入ったのではないが、そんな気がする記録的猛暑が続く。

八月初旬、新議員が登院し、雰囲気が変わった。それでも先輩になつて嬉しいことがある。三年間滅私奉公(?)した国会対策委員会から外れたことだ。以降、会期中毎朝早く登院することも、欠席委員の「差し替え」でいろいろな委員会に出席させられることも、ない(はずだ)。万歳!

お盆休みは昨夏同様、読書に勤しんだ。うち再読が一冊、松本清張著『波の塔』である。初読はちょうど二〇年前、司法修習生の時だった。映画やテレビでご存じの方も多いだろうが、ミステリーというよりは恋愛小説である。東京地検の新米検事小野木が恋に落ちた美しい女性頼子。人妻の彼女はやがて離婚を決意し、二人は将来を誓い合うが、その矢先、運命は二人を贈収賄事件捜査検事と被疑者の妻としての対面に導くのだ。彼は辞職、彼女は樹海に消えていく……。

清張の小説には安易な偶然の出会いが多すぎるといった欠点もあるが、文章は格調が高く、作品は実に魅力的である。時代を見据え、その香りを漂わせ、登場人物の心理を丁寧に書き込み、人間の弱さを冷徹かつ温かい目で見つめている。

時、昭和三四年。
まずは会話の美しさに驚かされる。親に対し、夫に対し、恋人に対し、ごく自然に敬語

(丁寧語・尊敬語・謙譲語)が使われているのだ。これ以後徐々に、友だち夫婦・親子が増え、師に対してすら敬語を使わない人が多くなった。相手を敬わないから敬語が不要なのか、敬語がすたれたから敬う心が失せたのか、おそらくはその両方だろう。

言語は文化であり、思考そのものである。例えば、ハンゲル語は日本語と最も類似した言語だが、受動態がない。つまり、「日本が韓国を侵略した」のであって、「日本に侵略された」という概念はないのだ(眞善花著『スカートの風』)。「泥棒に入られた」という日本語に入られた自分のほうにも落ち度があったのだというニュアンスがあることを、著者はずいぶん後になって理解したという。

今回もまた、忍ぶ恋の美しさにうっとりさせられた。恋人からの一方的な連絡をひたすら待つ男、逢瀬ごとのひたむきな緊迫感。携帯電話やメールで容易に連絡がつき、恋もセックスも、いや不倫でさえ手軽な現代が失ったものがここにはある。物の豊かさはえてして心の貧しさを招く。貧しい心で恋はできない。本当の意味での大人にしか美しい恋はできないのである。

ことに頼子は、和服が似合い、知性と教養に溢れた理想の女性として描かれている。互いに大人だからこそ相手を思いやり、抑制的でないが情熱的な恋が可能なのだ。その二人がまだ二七、八歳の設定なのに驚かされ

る。今だとあと最低五歳は必要だろう。面白いのは、小野木に恋する二二、三歳の娘がまだ「少女」として描かれていることだ。当時、その先の三〇歳は分別を弁えた立派な中年だったはずだ。そして、四八歳はすでに初老の領域だったのである(石川達三著『四八歳の抵抗』)。何にもまして大きな発見は、二〇年という歳月が読み手をも変化させたことだった。

初読時、私が感情を移入したのは頼子だった。身を灼く恋を捨てるなんてなんとまあストイック、樹海に消えるなんてなんとまあ口マンティックかと。だが今回、私が自然に感情を移入していたのは小野木のほうだった。もはや「頼子以外に生きてゆく希望がなくなった」彼は、約束どおり東京駅で恋人を待つ。永遠に現れることのない恋人だ。

「その不安は妙に空虚だった。……小野木は空しいものと戦っていた。それは、絶望との闘争だった。……小野木の耳は、激しい音響を聞いた。それは、頼子との間が断ちきれ、自分が落ちていく音だった。……」

胸が締めつけられるように痛んだ。この絶望感を、以前はなぜ共有し得なかつたのだろう。そのことのほうが不思議だった。だが、答えはすぐに出た。「その後の人生経験」。

今の私には頼子は自分勝手な女だと映る。人妻の身で主導的に恋をリードし、純真な男を翻弄し、あまつさえ道ならぬ恋を夫に知られることで、恋人の天職を奪ったのだ。計り



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』『少年被疑者』『告発捜査』『日本の司法文化』がある。昨年一月に『少年法は誰の味方か』(角川書店)が発行となった。
<http://www.2.ky3web.ne.jp/~tomokos>
にて議員活動等を報告中。

知れない衝撃に耐え、ただ恋故に運命を甘受しようとしている男を、彼女は非情にも捨て去った。それも最も残酷な方法で。彼女は自らのためではなく相手のためにこそ共に生きねばならなかつたのだ。一瞬の苦しみでしかない死。そこに卑怯にも逃げ去ることで、彼女は恋人を永遠に殺したのである。

裁判官訴追委員会委員として、春から夏にかけて、買春裁判官の審理に携わった。全員一致の「訴追相当」決定。常識を備えることはいわずもがな、人生経験が乏しくては人を扱えないことを、改めて考えさせられる。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)

女性検事が見る眞実 捜査官へのヒント その⑤

『一年一昔』

佐々木 知子

いやはや昨今のモラル低下には目を覆いたくなるばかりである。外務省の犯罪は底なし。警察不祥事も相変わらず。教師の不祥事にも驚かなくなつて久しいが、ついに「手錠教師」ときたものだ。

尊敬する友人が言う。教師の質が落ちたのではなく、日本人全体の質、つまり「民度」が落ちたのだと。また、某有名教授いわく「日本人は劣化している」と。公私のけじめがなく、人に迷惑をかけることなど何とも思わなくなつたというのである。

数年前ルーズソックスなるものがやはり始め、そのころから地べたに座り込む若者をよく見かけるようになった。体力がないなあ、しつてが悪いなあ、と眉をひそめていたが、徐々に慣れてしまった。人前で食べ物やばくつく。いちやつく。化粧をする。私自身はまだ目撃していないが、平気で着替えまでするらしい。一説によると、彼らの頭は無関係な者を「人」とは認識しないのだという。だから気にしない。なるほど。こうした若者がいざ社会人になるのだから国力が落ちるのは当然だ。かつまた親にもなるから、どんな子どもが育つか、考えるだに恐ろしい。少年事件を扱ってよく思ったが、子どもはまさに親のコピーである。身近な親こそが大人のモデルになるからだ。しつてと言うと大変に聞こえるかもしれないが、親自身がきちんとあいさつをする、人の迷惑にならな

いように行動するといった生活態度をとつていけば、子どもは自然にそれをまねて育つものだ。反対に、いくら口でうるさく言つても親自身が不実行だと子どもは親をばかにし、言うことを聞かない。子どもは親の背中を見て育つのだ。言葉を聞いて育つのではない。そうした欠陥親にもまた親がいる。やはりまともではなかつたはずだ。実際、年代を問わず、他人の迷惑を顧みない人のなんと多いことか。携帯電話での声高な話。列の割り込み。老人や妊婦にも席を譲らない、等々。日本古来の「恥の文化」(ルース・ベネディクト著『菊と刀』)は一体いつ消えてしまったのだろうか。

もちろん、戦後だ。戦後の教育は、時代を下につれだんだん悪化してきたように思われる。自信を喪失し、ただ物わかりよく努めようとする親たち。悪平等主義の学校。管理主義体制下の教師たち。マニュアルと偏差値重視の受験教育・学歴偏重。社会全般にはびこるゆがんだ自由と権利。自由は責任と、権利は義務と、一対だというのに。西洋の個人主義は本来強い自己責任を伴う。それが、だつて私の自由じゃん、だれの迷惑になるじゃない……。

最近私は、こうした教育・風潮を生み出した政治の責任を考へるようになった。戦争に負けたというだけで古来の伝統文化をも捨て去り、日本人であることに誇りを持たなくし

てしまった。その典型が歴史教科書問題と靖国神社参拝問題。国の歴史を国民にどう教えるか。国のために死んだ者をどう弔うか。それらは純然たる内政問題であり、近隣諸国(韓国と中国)の干渉には毅然として臨むべきだ。国が独立国の呈をなしていないのに構成員である国民がなぜ誇りを持つてよう。昨今の少年非行、全体的なモラルの低下を見るにつけ、政治の責任を思わざるを得ないのだ。

日本は揺れている。そう感じているところに大事件が勃発した。九月一日夜(日本時間)を境に世界全体が大きく揺れ出したのだ。アメリカでの同時多発テロ。ミサイル防衛に代表される世界一のハイテクと情報網は自爆覚悟のアナログになす術をもたなかった。

聖戦(ジハード)での死が神に捧げる崇高な死であるという彼らのメンタリテイが把握外だったのではないか。面目を失つたアメリカは直ちに「戦争」を宣言し、あくまで「犯罪」の概念しかない我々に新たな衝撃を与えた。地道な証拠蒐集で容疑者を特定し、その引渡しを求める。そして公の法廷で裁く……。日本が支持すべきはあくまでテロ対策であつて、報復戦争ではない。近代法が報復のための私刑を禁止したのは、報復は新たな報復を生み、際限がないからである。

今回の相手は国ではなく、本来の戦争とは異なる。世界中に存在し、容易に移動し、聖戦での死をも厭わない。講和などそもそもあ

り得ないのだから、以後多くの国々・民族・宗教対立を巻き込んだ際限のない世界戦争に発展する可能性も否定できない。六年前、日本でも同時多発テロが起きた。世界初の化学兵器使用テロだ。今や何でもあり、禁止手はないと見ている。同盟国日本も標的になると考へてしかるべきだろう。

今や一年一昔。刻一刻新たな、しかも信じられない事件・事故が起こり、事態についていくだけで大変な努力だ。ストレスで健康を害さないよう、緊張感を維持しながらも適度に気分転換しつつ、日々の職務をこなしたいものである。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』がある。昨年一二月に『少年法は誰の味方か』(角川書店)が発行となった。

<http://www.2.tky.3web.ne.jp/~tomokos>
にて議員活動等を報告中。

